学生に主体性

大学関西フォーラム 第18回懇話会

＊座談会

岡山大の谷口秀夫・大学改革担当理事、福井工業大の池田岳史・学長補佐を招き、「地域からのグローバル人材育成」「大学改革」をテーマに座談会を開いた。司会は、行成靖司・読売新聞大阪本社科学医療部長。

地域からのグローバル人材育成

——地域からのグローバル人材の育成について、取り組みや狙いを聞きたい

谷口　我々はまず「グローバル人材とは何か」を議論し、広い視野で周囲と協調性を持てる人間だと結論づけた。そのうえで、学生が「三つの基礎力」（教養と専門と日本語も含む語学）を身につけ、複数の学部で学び、社会との接点を持ち、異文化を体験するプログラムを設けた。あらゆる場面で適切な判断を下せる人材の育成を目指し、岡山県や地元の経済界とも協力して進めている。

池田　「グローカル」という、グローバルとローカルを組み合わせた造語をキーワードにした。柱となるのが、2013年度に導入した英語教育プログラム「SPEC」だ。英語と聞いただけで抵抗感を持つ学生が多いので、4年間を通じ、英会話中心で、親しみを感じながら学べる内容にした。教員10人中8人が英語を母国語とする外国人だ。卒業に必要な外国語の単位は以前の倍の20単位と厳しくしたが、学生や親からも好評だ。

——福井には眼鏡製造という世界的な産業がある。そこに狙いを定めているということはないのか

池田　グローカルをテーマに据えたのは、地元経済団体などからの要望がきっかけだ。海外に拠点を持つ地元企業も多く、英語が完璧とまでいかずとも、「ちょっと海外へ行ってきて」と言われた時、なんら抵抗感なく出かけられる人材を育ててもらえないかと、求められた。SPECで学生たちは、日常的に外国の人や英語と触れあって抵抗感を薄め、「楽しい」と言う声も増えている。

——岡山大の具体的な取り組みを教えてほしい

谷口　国の基準などでは本来、一つの科目で15回（コマ）授業を受けて2単位得るのに、1コマあたり2時間の教育を受ける必要があるのに、岡山大を含む多くの大学で90分を2時間とみなしてきた。これを来年度から改める。

ただ、2時間連続では学生の集中力が続かないから、1コマ60分として授業回数を30コマにする。学生は2単位取るのに従来の1・3倍時間をかけることになる。

もう一つは「4学期制」の導入だ。前期と後期をそれぞれ2分割して、途中の3か月を留学に使っても単位が取れるように配慮する。

大学改革

——大学は待ったなしの改革を迫られている。両大学での取り組みは

池田　今でこそ入学定員を3年連続で満たしているが、福井工業大では志願者が2008年まで減り続け、06年から7年間定員割れが続いた。当時、私は職員も兼務して学生を募集する立場にいたが、危機的な状況と受け止めていた。

改善計画は毎年議論されたが実現せず、11年に経営側から経費・教員削減、学部学科再編を求められるに至った。検討組織も、経営側の判断で若手の職員と教員で構成することになった。

検討の中では、開学から50年たつ大学が地域でどのように見られているかを念頭に置き、大学が持つ技術のブランド力を生かすべきだとの強い意見が出た。

この方針に沿って、教育や研究の内容をわかりやすく伝える取り組みは成功し、志願者数は回復した。地元出身の職員を入れ、改めて地域での立ち位置を明確にできたことが大きい。

谷口　私は学長から改革担当に指名された。学長のリーダーシップがないことには動かない。あとは周りがどう支えるかだ。

私は、協力者として学長補佐を3人選んで戦略を練った。学部長と1対1で会い、意見を聞いた。そこでは記録を取らず、他学部の問題点も気兼ねなく話せる自由な議論にした。

改革は戦略だ。進め方を間違えると失敗する。情報の出し方を間違えれば抵抗にあって何も進まなくなる。

私は作成する文書に非常に大胆なこと、例えば「この学部は再編が必要ではないか」ということを書いた。こうした文書は誤解を招くので、電子化して誰もが見られるような状態にはしない。紙の書類として、議論に加わる特定の人だけが読めるようにした。

——最後に一言ずつ

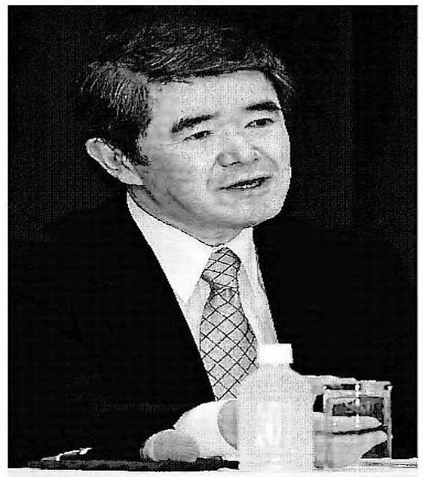
谷口　改革は継続が一番大事だ。一過性に終わらせないことを考えて担当しなければならない。

また、検討の過程で考え方をあいまいに伝えてはいけない。人によって取り方の変わるカタカナ語は要注意だ。例えば「コミュニケーション」は意思の疎通を指すが、情報学の分野では「通信」と訳す。言葉は、良くかみ締めて使わないといけない。

池田　地域のニーズを上手にくみ取り、地域で活躍する人材を時代に合わせて育てていくのが地方の大学の使命だと思っている。

それを実現するためには、スピーディーに改革を実現しなければならない。我々は、経営側と教員側が互いに理解しながら進めることができた。学長のリーダーシップのもと、小回りの利く改革を続けたい。

岡山大大学改革担当理事
谷口秀夫（たにぐち ひでお）氏



九州大工学研究科修了。NTT、NTTデータ通信などの勤務を経て九州大助教授、2003年に岡山大工学部教授。14年から現職。専門は情報工学。

福井工業大学長補佐
池田岳史（いけだ たけし）氏

愛知工業大卒業、京都工芸繊維大工芸科学研究科修了。2012年に福井工業大教授、13年から学長補佐。学部・学科再編を検討する学内会議のメンバー。専門は都市景観デザイン。

研究を紹介 志願者回復

参加大学の取り組み

課題解決力学ぶ

井上博・阪南大学長「建学の精神に国際商業人の育成を盛り込んでおり、地域と世界を結ぶ人材を育てる教育の構築を目指している。3年生の演習科目『キャリアゼミ』では、学生が大阪市内の団体と外国人観光客の誘致に乗り出したり、ファッション関連企業と組んで製品の海外展開について戦略を練ったりしている。こうした能動的な学びを通じて、課題を解決する力を身につけてもらいたい」

個性どう出すか

佐藤武司・大阪経済大理事長「懇話会では、少子化やグローバル化を受けて長期的に対応する工夫を聞けて、有意義だった。教授会が改革のブレーキになる傾向があったが、4月施行の改正学校教育法で教授会の権限が抑えられることになり、理事会のリーダーシップで改革を進めやすくなった。大学の個性をいかに打ち出すのかが焦点。大阪経大らしさを前面に、社会に役立つ学生を育てたい」

長期就業体験も

大城光正・京都産業大学長「一つのキャンパスに文系学部と理系学部が共に集い、様々な価値観を共有し刺激しあう空間になっている。先輩が後輩の学習や就活を自主的に支援する活動が広がり、自ら考えて行動する力を養っている。今年から、学生が派遣先から報酬を受ける長期型の就業体験を始めた。日本では珍しい試みだが、仕事に対する責任感を自覚できる、貴重な機会だと考えている」

防災の成果還元

西沢良記・大阪市立大学長「公立大に求められている地域の課題解決に貢献する創造力を発揮し、『都市防災教育研究センター』を設けて、巨大地震に備えた研究成果を地元に還元する取り組みを進めている。地域の課題もグローバルな視点で解決手段を探る時代だ。今年から世界的な視野で大阪の課題を考える講義を行い、地元の文化に精通しつつ、国際社会で通用する力も備えた人材を育成したい」

探求心を持とう

金沢成保（かねやす）・大阪産業大学長「携帯端末の登場でいつでもどこでもネット検索ができるようになり、知識を頭にためておこうと努力する習慣が学生の間で希薄になった。創造性は膨大な知識なしには生まれないから、学生たちには知的好奇心や探求心を持ってほしい。そのためにも、自ら課題を見つけて深く考える姿勢を入学後のできるだけ早い時期に身につけられるよう、教育を進めていきたい」

教育問題 積極的に

読売新聞大阪本社　弘中喜通社長（現・会長）あいさつ

今ほど教育のあり方が注目される時代はないでしょう。大学には企業・財界から様々な要求が出されています。教育改革では、知識偏重ではなく、思考力と判断力を重視する教育、高校生の学力や力を判断する新しい方法の導入が求められています。どれも正解を見いだすのは難しいでしょう。

資源の乏しい日本にとって人は一番の財産です。ますます人口が少なくなる時代、教育のあり方はより一層大事にしなければならないテーマでしょう。読売新聞は教育の問題をより積極的に取り上げてまいります。